

令和 2 年 6 月 1 日現在

機関番号：37102  
 研究種目：基盤研究(C) (一般)  
 研究期間：2016～2019  
 課題番号：16K02151  
 研究課題名(和文) フランス現代哲学における主体・人格概念の分析(愛・性・家族の解体と再構築を軸に)

研究課題名(英文) Analyzing the concepts of Subjectivity and Personality in French Contemporary Philosophy

研究代表者  
 藤田 尚志(Fujita, Hisashi)

九州産業大学・国際文化学部・教授

研究者番号：80552207

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：第一に、フランス現代哲学の中で近年翻訳出版を機に新たに注目を集めることになったシモンドンの『個体化の哲学』に注目し、個体化の文脈で主体や人格概念を再検討しようと試みた。まだ論文文化は出来ていないが、2019年8月に大阪大学で行なった集中講義でその一端を示しえた。第二に、2019年6月にアンリ・ベルクソンのコレージュ・ド・フランス講義『時間概念の歴史』の翻訳を出版・刊行し、そこに見られる主体・人格概念をハイデガーとの比較において検討しようとした。その端緒は翻訳あとがきに記した。第三に、まだそれほど注目されていない18世紀の文学者レチフ・ド・ラ・ブルトンヌの文学に新たな光を当てようと試みている。

#### 研究成果の学術的意義や社会的意義

近代社会は「個人」という観念を軸に構築されてきたが、現代社会やそこで展開される愛・性・家族の解体と再構築といった現象では「分人」という概念がますます重要性を有してきているように思われる。本研究では、フランスの現代哲学者や、関連する近現代の思想家・作家たちが主体や人格性といった伝統的な概念をどう取り上げ直していたのかを検討することを通じて、この新たな概念である「分人」の特徴を明らかにすることを試みた。

研究成果の概要(英文)：First of all, we reconsidered the concept of subject and personality in the context of individualization, paying attention to Simondon's "Philosophy of Individualization", which has recently attracted a lot of attention in French contemporary philosophy as a result of translation and publishing. We tried, although it has not been made into a paper yet, to show an esquisse at the moment of the intensive lecture given at Osaka University in August 2019. Secondly, in June 2019, we published a translation of Henri Bergson's College de France Lecture called "History of the Idea of Time", in order to examine the concept of subject and personality in comparison with Heidegger. We just began this research in the postface of the translation. Third, we seek to shed new light on the lesser-known 18th-century literary, Retif de la Bretonne.

研究分野：フランス哲学・文学

キーワード：ベルクソン フランス近現代哲学 シモンドン フランス文学 レチフ・ド・ラ・ブルトンヌ 愛・性・家族 分人

1. 研究開始当初の背景

**研究成果 科研PD(2006-08年):フランス近現代思想における身体論(科学・芸術・政治との関連から見たその展開)** 学振・特別研究員(DC2)の研究を継承・拡大して三年間の研究を行い、共著を5冊、単独論文を9つ刊行した。ここで、(1)固有身体の所有性(生命倫理に典型的に見られる法的・政治的問題)、(2)知覚と直観の問題(身体直観などの美学的な問題)、(3)技術の問題(義肢など、無機的なものが有機的に身体に組み込まれる)と、身体を考える科学的・美学的・政治的な三つの視点が確立された。

**研究成果 若手スタートアップ(2009-2010年):フランス近現代思想における身体論(愛・性・家族から見たその展開)** フランス近現代思想に「(非)有機的(non)-organique」、すなわち身体外技術を絶えず取り込んでいく身体を根幹に据える身体論が暗に孕まれていることが明らかになってきた。この思想的伏流をさらに検討するために、「愛・性・家族において制度づけるものとしての身体」という多角的かつ統一的な視点からフランス近現代思想の諸テクストを検討した。二年間の研究を遂行し、論文6本を執筆、訳書を1冊刊行、国際シンポジウム等でのフランス語発表を4件、学会等での日本語発表を4件行なった。

**研究成果 若手B(2013-2015年):フランス現代哲学における主体・個体・人格概念の再検討(家族の解体・再構築を軸に)** 今回の研究に直接つながる研究の方法論が模索され、理論的基盤(愛/性/家族の分離接合、個人と人格、契約と約束の対立など)が確立された。フランス現代哲学における主体・個体・人格概念の諸相を具体的に再検討すべく、家族という具体的な現象に限定して諸テクストを検討した。三年間の研究を遂行し、共著を2冊(英語・フランス語)刊行、論文3本を執筆、国際シンポジウム等でのフランス語発表を2件、英語発表を1件、学会等での日本語発表を10件行なった。

**研究成果 海外研究者との協働** 上記成果 との関連で特に強調しておきたいのは、フランス・イギリスの研究者2名、東京の研究者1名を招いての国際シンポジウム「結婚の脱構築——レヴィ=ストロース、ボーヴォワール、クロソフスキー、デリダ」(2010年11月20日、九州日仏学館)を主催したこと、また、2011年2月10日には、フランスのパリ・エコール・ノルマル・シュペリウールで国際シンポジウム(アジアにおける現代フランス哲学)を主催した折、応募者自身「結婚の形而上学とその脱構築——契約・優先性・個人性」と題した発表を行なったこと、2014年8月5日には西南学院大学で、フランス人研究者2名、東京・滋賀の研究者2名を招いて国際ワークショップ「結婚の脱構築——フランス同性婚合法化以後」を開催したことである。今回のプロジェクトでは、日本のみならず、フランスにおいても国際シンポジウムを開催することで、積極的に研究を発信していきたいと考えている。

**身体論から生の制度の探究へ:愛・性・家族の事例を通じた主体・人格概念の再検討** ドゥルーズ、フーコー、デリダをはじめとする現代フランス哲学の思想家たちは、「主体の解体」を唱え、「個体」ではなく「個体化」を称揚し、「人格」概念を批判したことで一般に知られているが、伝統的な愛・性・家族概念に対しても批判的分析がなされている。ドゥルーズの『アンチ・オイディプス』に見られるカップルの愛の批判、フーコーの生政治における近代的な性の囲い込み分析、『弔鐘』に見られるデリダの「家族の脱構築」などである。だが、逆に言えば、これらの記述は、今激しく変容しつつある現代の人間関係、とりわけ家族をどう理解すればよいのかを探る手がかりになるのではないか。以上のような個人的・研究史的背景のもとに次のような目的を立てるに至った。

## 2. 研究の目的

本研究は、中心的な分析対象として、現代フランス哲学の思想家たちの愛・性・家族に関する記述を取り上げ、すぐれて現代的な問題でもある愛・性・家族の錯綜体(事実婚やPACSなど新たな諸現象まで含めた、広義の意味での“結婚”)が背後に隠し持つ無意識の形而上学を解明するために、主体・人格といった根本的な概念を、優先性や契約といった概念とともに徹底的に再検討することを試みる。現代フランス哲学を代表する思想家たちのテキストを丹念に読み解いていくことで、今もなお激しく変動しつつある「生の制度」について哲学的な考察を行なうための示唆を得ること。これが本研究の目的である。

もう少し詳しく言えば、本研究は、**フランス現代哲学における主体・人格概念の検討を、愛・性・家族の解体・再構築**に関する思想家たちの事例分析に即して行なうことを目的とする。すなわち、20世紀の実存主義・現象学から構造主義・ポスト構造主義に至るまで、多様な思想潮流に属する思想家たちが独自の**身体概念**から出発して、とりわけ**愛・性・家族の提起する諸問題**をどう取り扱ってきたのかを、精密なテキスト読解に基づいて検討することを旨とする。主体・人格概念の徹底的な改変を試みたフランス現代哲学を、現代社会において動揺する愛・性・家族に関する新たな理論の模索として読み直すことで、次世代の生命哲学を展開していく可能性を探りたい。

## 3. 研究の方法

**どのような方法論を用いるか** 全体的な方向性としては、「**フランス近現代思想の身体論を科学的・芸術的・政治的観点から考察する**」という特別研究員 PD での研究方針を出発点として、若手スタートアップで試みた(非)有機的身体論、すなわち「**絶えず多数多様化していく社会的・技術的諸関係の束として固有身体を捉える**」観点から、若手 B でのプロジェクト(家族論)を発展・深化させ、「**主体・人格を愛・性・家族の関係において考える**」というアプローチを目指す。つまり、20世紀フランスの思想家たちによる主体・人格概念超克の試みを、彼らによる愛・性・家族の解体とその先にある新たな形の模索に注目しつつ、「身体を通して人間の生を制度づけるもの」の思考として分析する。

**何をどこまで明らかにしようとするのか** フランス現象学の哲学者たち(サルトル、メルロ＝ポンティ、レヴィナス、ミシェル・アンリ、ジャン＝リュック・マリオン) 構造主義・ポスト構造主義の思想家たち(レヴィ＝ストロース、ドゥルーズ、フーコー、デリダ、クロソウスキー)のテキストを取りあげ、そこに見られる主体・個体・人格概念の取り扱いを、とりわけ愛・性・家族関係の分析に絞って分析していく。その際、彼らの試みを、**主体の否定ではなく脱主体化の探究、人格の否定ではなく新たな人格概念の創造と捉える**ことを試みる。その試みが成功したとき、彼らの愛・性・家族「批判」もまた、異なる相貌を見せるはずである。高齢化・少子化・晩婚化・非婚化の進む先進諸国で「代理家族」など新たな家族モデルが模索される現在、旧来の家族概念の復権・復興ではない、新たな家族論の理論的可能性の探究が(新たな主体・人格概念の創造とともに)急務である。現代フランス哲学の重要なテキストの精緻な読解・分析を通じて、そのようなありうべき「生の制度」の要請に対する応答を試みたい。

**方法論的特色** まず、方法論的な特色として、思想分野に多く見られる外在的なテキスト読解に対して、思想史的なパースペクティブを見失うことなく、テキスト内在的な読解を試みる点が挙げら

れる。つまり、今回のプロジェクトにおいても、**テキストの読解**ということに徹底的にこだわりたい。

**内容的な特色** 次に、愛・性を含んだ人間関係の制度化(生の制度)である「家族」という観点から、フランス現代哲学の主体・個体・人格概念の再検討を行なう点である。このような焦点化は、**愛・性・家族というアクチュアルな問題に対して実践的な寄与を試みると同時に、主体・人格概念の批判的再検討という形で理論的な寄与を試みる**ものである。グローバリゼーション下で、愛・性を含んだ人間関係・家族(結婚)関係もまた、加速的に多様性・流動性を高めつつ、しかし安定性をも求めている。フランス現代哲学を「生の制度」の再構築の模索として捉えることで、理論的・実践的な寄与が期待される。

**研究成果発表における特色** 最後に、まだまだ英語やフランス語での発表が少ないという現状に対して、申請者はこれまで培ってきた研究者間ネットワークを活用し、以上にその概要を述べてきた本プロジェクトの成果を、これまで同様、可能な限り**日本語のみならず仏語や英語で発表**していく。

#### 4. 研究成果

近代社会は「個人」という観念を軸に構築されてきたが、現代社会やそこで展開される愛・性・家族の解体と再構築といった現象では「分人」という概念がますます重要性を有してきているように思われる。本研究では、フランスの現代哲学者や、関連する近現代の思想家・作家たちが主体や人格性といった伝統的な概念をどう取り上げ直していたのかを検討することを通じて、この新たな概念である「分人」の特徴を明らかにすることを試みた。

もう少し詳しく言えば、第一に、フランス現代哲学の中で近年翻訳出版を機に新たに注目を集めることになったシモンドンの『個体化の哲学』に注目し、個体化の文脈で主体や人格概念を再検討しようと試みた。まだ論文化は出来ていないが、2019年8月に大阪大学で行なった集中講義でその一端を示した。第二に、2019年6月にアンリ・ベルクソンのコレージュ・ド・フランス講義『時間観念の歴史』の翻訳を出版・刊行し、そこに見られる主体・人格概念をハイデガーとの比較において検討しようとした。その端緒は翻訳あとがきに記した。第三に、まだそれほど注目されていない18世紀の文学者レチフ・ド・ラ・ブルトンヌの文学に新たな光を当てようと試みている。

業績の数としては、著書6冊(すべて共著、うち共編著5冊)、翻訳書1冊、論文7本(うち査読論文1本)を刊行し、研究発表を16回行なった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 藤田尚志	4. 巻 7
2. 論文標題 家族の脱構築 ヘーゲル、デリダ、バトラーによる『アンチゴネー』読解から出発して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 けいそうビブリオフィル	6. 最初と最後の頁 1
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤田尚志	4. 巻 第73・74合併号
2. 論文標題 知的誘惑装置としての大学 講演会へのイントロダクション（第28回国際文化学会報告：河野真太郎「戦う姫、働く少女の生きる道 ワークフェア・愛情搾取・コミユカ」へのイントロダクションとして）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 九州産業大学国際文化学部紀要	6. 最初と最後の頁 71-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤田尚志	4. 巻 第73・74合併号
2. 論文標題 知的Gymnasticsの場としてのゼミ 第二部「河野先生との語らい」の紹介（第28回国際文化学会報告：河野真太郎「戦う姫、働く少女の生きる道 ワークフェア・愛情搾取・コミユカ」の結びとして）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 九州産業大学国際文化学部紀要	6. 最初と最後の頁 96-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤田尚志	4. 巻 48
2. 論文標題 L'immaterialisme de Macherey	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立教フランス文学	6. 最初と最後の頁 43-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤田尚志	4. 巻 6
2. 論文標題 家族の時間 是枝裕和作品における分人的モチーフ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 社会芸術学会『社藝堂』	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤田尚志	4. 巻 25
2. 論文標題 ベルクソンからハイデガーへ：リズムと場所(内在的感性論と内在的論理学) (平成二十八年度シンポジウム提題)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 西日本哲学年報	6. 最初と最後の頁 117-139
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤田尚志	4. 巻 49
2. 論文標題 根源的倫理学とは何の謂いか ハイデガー『ヒューマニズム』書簡に関するノート	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 東京大学仏語仏文学研究会『仏語仏文学研究』第49号：塩川徹也先生古稀記念特集号	6. 最初と最後の頁 451 458
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Hisashi Fujita et al.	4. 巻 Vol XXIV, No 2
2. 論文標題 Bergson(-ism) Remembered: A Roundtable	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Journal of French and Francophone Philosophy - Revue de la philosophie française et de langue française	6. 最初と最後の頁 221-258
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) <a href="https://doi.org/10.5195/jffp.2016.778">https://doi.org/10.5195/jffp.2016.778</a>	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計16件（うち招待講演 14件 / うち国際学会 7件）

1. 発表者名 藤田尚志
2. 発表標題 L'immaterialisme de Macherey ( マシュレの非唯物論 )
3. 学会等名 公開シンポジウム「フローベール、スピノザ、ベルクソン 19世紀フランス文学と哲学」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤田尚志
2. 発表標題 性的モノ化をバケモノ化する
3. 学会等名 第12回文芸共和国の会：市民参加型シンポジウム「生が、性が、モノモノしい」(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤田尚志
2. 発表標題 家族の時間 是枝裕和の近年の作品における「分人」的モチーフ
3. 学会等名 国際シンポジウム「ネット文化のなかの台湾と日本 オリジナリティー再考」@京都工芸繊維大学60周年記念館1階大ホール(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 藤田尚志
2. 発表標題 西洋哲学の起源と愛・性・家族の未来 プラトン『饗宴』を読み直す
3. 学会等名 「考える」ことを楽しむ哲学入門講座2017 入門講座 トーク「結婚に愛は必要か？」@石川県西田幾多郎記念哲学館・哲学ホール(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 藤田尚志
2. 発表標題 レチフ的ユートピアにおける結婚 『南半球の発見』を中心に
3. 学会等名 九州仏文学会ワークショップ「変愛のフランス文学」@西南学院大学（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 藤田尚志
2. 発表標題 フーリエ的ユートピアにおける愛・性・家族 『愛の新世界』と結婚の未来
3. 学会等名 国際シンポジウム「フーリエ研究集会」@一橋大学（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 藤田尚志
2. 発表標題 18世紀フランス文学における結婚の形而上学とその脱構築 レチフの場合
3. 学会等名 日本フランス文学会2016年度秋季大会ワークショップ「レチフ・ド・ラ・ブルトンヌを読む 記憶・系譜・道徳」
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 藤田尚志
2. 発表標題 ベルクソンの未来 『物質と記憶』における場所の論理・超図式論・憑在論
3. 学会等名 PBJ第8回国際シンポジウム「『物質と記憶』を診断する ベルクソンと脳・時間・記憶の諸問題」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 藤田尚志
2. 発表標題 家族の脱構築   ヘーゲル、デリダによるアンティゴネー読解
3. 学会等名 第23回 新潟哲学思想セミナー「家族の”きずな”を哲学する」(招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 藤田尚志
2. 発表標題 ハイデガーからベルクソンへ   伸張(Dehnung)と振動(Schwung)
3. 学会等名 西日本哲学会第62回大会シンポジウム「ハイデガーとベルクソン 生の哲学再考」(招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 藤田尚志
2. 発表標題 家族の時間   是枝裕和作品における「分人」的モチーフ
3. 学会等名 國立臺灣大學藝術史研究所主催・國際學術工作研討會「近代・神話・共同體：臺灣與日本」(招待講演)(國際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 藤田尚志
2. 発表標題 ベルクソン的人格概念の再検討   リキエ『ベルクソンの考古学』から出発して
3. 学会等名 PBJ-DI分析系分科会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤田尚志
2. 発表標題 「或る生」の哲学とは何か？ 秋保亘『スピノザ 力の存在論と生の哲学』（法政大学出版局、2019年）を読む
3. 学会等名 スピノザ協会 第69回研究会 秋保亘『スピノザ 力の存在論と生の哲学』合評会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤田尚志
2. 発表標題 The range of the voice: Towards a Bergsonian theory of Personality
3. 学会等名 "Remembering: Analytic and Bergsonian Perspectives" (Franco-Japanese workshop)（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤田尚志
2. 発表標題 Coup de sonde, coup de genie : PBJ (Projet Bergson au Japon), traduction japonaise, quelques reflections sur le cours
3. 学会等名 "Bergson : L'evenement des cours au College de France"（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤田尚志
2. 発表標題 ベルクソンの「可能性の条件」とは何か？ 岡嶋隆佑「自由行為の哲学 初期ベルクソン哲学における時間と空間 」を読む
3. 学会等名 三田哲学会シンポジウム「ベルクソンと自由 時間・空間から自由へ」（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計10件

1. 著者名 Shin Abiko, Hisashi Fujita, Yasuhiko Sugimura (dir.)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Georg Olms Verlag	5. 総ページ数 280
3. 書名 Mecanique et mystique : Sur le quatrieme chapitre des Deux sources de la morale et de la religion de Bergson	

1. 著者名 平井靖史・藤田尚志・安孫子信編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 書肆心水	5. 総ページ数 415
3. 書名 ベルクソン『物質と記憶』を再起動する 拡張ベルクソン主義の諸展望	

1. 著者名 アンリ・ベルクソン(藤田尚志・平井靖史ほか訳)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 書肆心水	5. 総ページ数 520
3. 書名 『時間観念の歴史 コレージュ・ド・フランス講義1902-1903』	

1. 著者名 合田 正人、坂本 尚志、増田 一夫、宮崎裕助、岩野 卓司、沢田 直、藤田 尚志、郷原 佳以、宮﨑 裕助、澤田 直	4. 発行年 2017年
2. 出版社 書肆心水	5. 総ページ数 317
3. 書名 共にあることの哲学と現実 : 家族・社会・文学・政治	

1. 著者名 平井靖史・藤田尚志・安孫子信（編）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 書肆心水	5. 総ページ数 384
3. 書名 ベルクソン『物質と記憶』を診断する 時間経験の哲学・意識の科学・美学・倫理学への展開	

1. 著者名 Shin Abiko, Hisashi Fujita et Yasuhiko Sugimura (dir.)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Olms Verlag	5. 総ページ数 318
3. 書名 Considerations inactuelles. Bergson et la philosophie française du XIXe siècle	

1. 著者名 藤本 夕衣、古川 雄嗣、渡邊 浩一	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 264
3. 書名 反「大学改革」論	

1. 著者名 平井靖史・藤田尚志・安孫子信編	4. 発行年 2016年
2. 出版社 書肆心水	5. 総ページ数 384
3. 書名 ベルクソン『物質と記憶』を解剖する 現代知覚理論・時間論・心の哲学との接続	

1. 著者名 藤本夕衣・古川雄嗣・渡邊浩一編	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 264
3. 書名 反「大学改革」論 若手からの問題提起	

1. 著者名 岩野卓司編	4. 発行年 2017年
2. 出版社 書肆心水	5. 総ページ数 300
3. 書名 共にあることの哲学 フランス現代思想が問う 共同体の危険と希望 2 実践・状況編	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>シンポジウム・ネット文化のなかの台湾と日本 オリジナリティ再考  <a href="http://repository.lib.kit.ac.jp/repo/repository/10212/2302/20170723_kouen_gaiyou.pdf">http://repository.lib.kit.ac.jp/repo/repository/10212/2302/20170723_kouen_gaiyou.pdf</a>          會議論文 Papers  <a href="http://www.artcy.ntu.edu.tw/09_detail_conf_9_paper.html">http://www.artcy.ntu.edu.tw/09_detail_conf_9_paper.html</a></p>
---

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考